
かわビジョン ～発・水の国2025～について

(注釈)

本資料は意見交換のための資料であり検討中の内容となります。
そのため、内容については変更する場合があります。

かわビジョン 目次(案)

第1章 河川行政の変遷

第2章 かわビジョンの位置づけと対象期間

第3章 大阪の「かわ」をとりまく環境の変化

3.1 気候変動等による自然条件の変化

- ① 降雨量の増大や台風の強大化等の外力の増大
- ② 渇水リスクの増大と水循環への影響

3.2 社会環境・社会構造の変化

- ① 気候変動を踏まえた流域治水・流域総合水管理への転換
- ② 多様な河川利用
- ③ 新技術・デジタル技術の進展と河川管理の高度化
- ④ 少子高齢化・人口減少社会の進展

3.3 EXPO2025 大阪・関西万博を契機としたレガシー形成

第4章 これからの大阪の「かわ」づくり ～持続可能な流域環境の創造～

第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて

5.1 「かわ」と治水

- ① 河川区域・集水域・氾濫域の流域全てで取り組む治水対策
 - 1) 気候変動により増大する外力に対する更なる施設整備と流域対応
 - 2) 最新の気象予測を活用する最大限の効果を発揮させる施設運用
 - 3) 100%の機能を発揮させるための適切な維持管理
- ② 想定以上のどんな災害でも「ひと」への被害0を目指して
 - 1) 新技術を活用した適切な災害・避難情報の提供
 - 2) 災害リスクを意識したまちづくりへの取り組み
 - 3) 逃げ遅れ0を実現するコミュニティの絆づくり

5.2 「かわ」と環境

- ① ネイチャーポジティブを意識した環境を改善させる「かわ」づくり
- ② グリーンインフラの活用を通じWell-Beingな社会を実現させる「かわ」

5.3 「かわ」とまち

- ① 水の恵みの最大化を意識したまちへのアプローチ
～流出抑制だけでない、気候変動の緩和や地下水涵養を意識し、
集水域と連携した「かわ」づくり～
- ② 観光資源となりうる「かわ」づくり
- ③ 移動や物流の軸としての「かわ」づくり

5.4 「かわ」と人

- ① 流域のあらゆる関係者が「かわ」と関わることの出来る場の提供
- ② 大阪府の「かわ」や災害に対する知識・解像度を上げるための場や情報の提供

第6章 さいごに

第1、2章 河川行政の変遷とかわビジョンの位置づけ

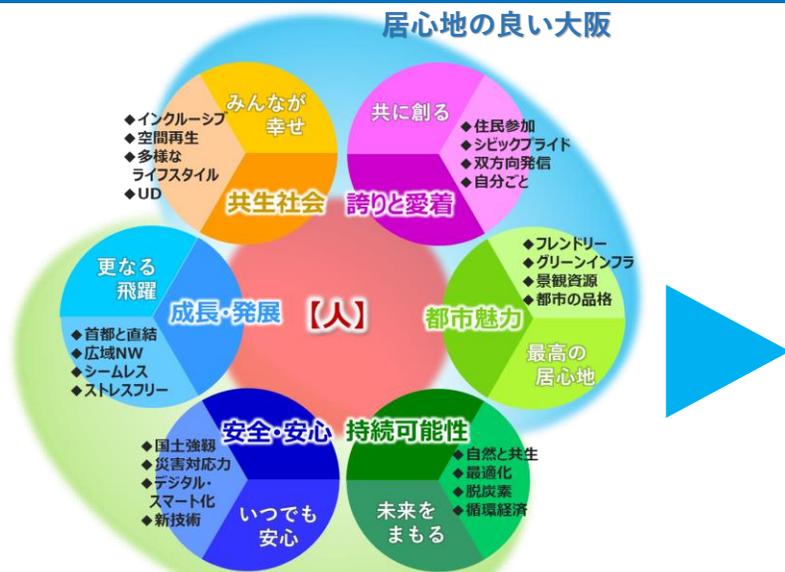
河川行政のこれまでとかわビジョンの概要

- 地球は「水の惑星」とも言われ、水は蒸発、降雨、浸透、流下といった水循環を通じて、地形や自然環境を形成し、日本の国土を形づくり、私たちの暮らしもまた、この水循環の中にあり、ときには水害などの脅威に向き合いながら、平時には生活や産業を支える水の恵みを受けて社会を営んできました。
- 平成8年に策定された大阪府河川長期計画「**発・水の国**」は、これらの社会情勢、技術水準を踏まえ、治水面・自然や水質などの環境面・河川の利用面での調和を目指した長期的な河川整備の基本的方向性を示すものでした。
- しかしながら、近年においては**気候変動の進展による降雨量の増大や台風の強大化、海面上昇といった自然条件の変化に加え、グリーンインフラの活用を通じたWell-Beingな社会の実現、多様化する河川利用へのニーズ**、さらには**革新的なデジタル技術をはじめとする新技術の進展**などにより、河川に求められる役割は大きく変化しています。
- こうした背景を踏まえ、本改訂版では、「気候変動の進展」や「ネイチャーポジティブ」、「水循環・水源涵養」といった視点を取り入れ、将来における「あるべき理想像」を描き、その実現に向けてバックカスティングの考え方により目指す「かわ」の姿を整理しました。
- さらに、「**かわと治水**」「**かわと環境**」「**かわとまち**」の観点を包括的に提示し、これらを統合した施策を展開します。
- これらの施策は河川管理者のみで達成できるものではありません流域に関わる「**人**」を中心に据え、誰もが誇りを持てる「かわ」づくりを進めます

かわビジョンの位置づけと計画期間

- 本ビジョンは、気候変動の進行を前提とし、その影響がより顕著となる **2100年**を長期的な将来像として見据え、そこから逆算するバックカスティングの考え方に基づき構築するものです。
- 一方、河川管理施設などの社会インフラは、数十年に及ぶ施設寿命を有しており、現在における整備・更新や管理の判断が、中長期にわたり社会や環境に影響を及ぼすという特性があることから、本ビジョンでは、2100年の将来像から逆算しつつも、施策の具体化や実行責任を明確にし、計画的な実装を進めるための節目の年代として2050年を位置付けることとします。

第4章 これからの大阪の「かわ」づくり ～持続可能な流域環境の創造～



【かわの理想の将来】

- ◆ まち並みに溶け込んだ、絵葉書になるような美しい、また祭りやアクティビティなど、地域ごとに土地の息吹が感じられる河川を目指します。
- ◆ 大雨や台風等の水害リスクに対しては、強靱な河川施設、グリーンインフラが集積した集水域と共に、最新のテクノロジーも活用し、アンダーコントロールされている状態を目指します。
- ◆ 河川から溢れた場合であってもコミュニティの「絆」により住民の命を守り抜きます。
- ◆ 「世界一水害に強いまち」として、世界中からのビジネスを呼び込みます。

望ましい未来の河川の姿からバックカスティング思考による目指す「かわ」の姿

【基本理念】「人」中心とした活力ある都市の実現に向け、**誰もが誇りたくなる「かわ」の実現**

- 大雨などの水害リスクに対し、人に被害がおよばない安全・安心なかわ
- 平常時に人が快適に利用できる、まちや地域に溶け込んだ美しいかわ

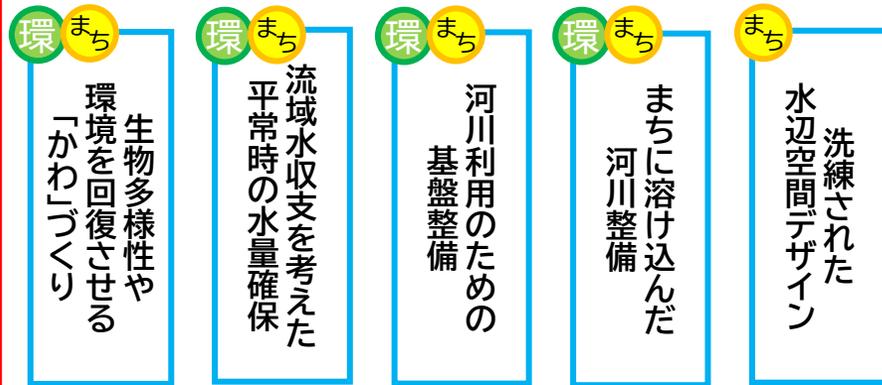
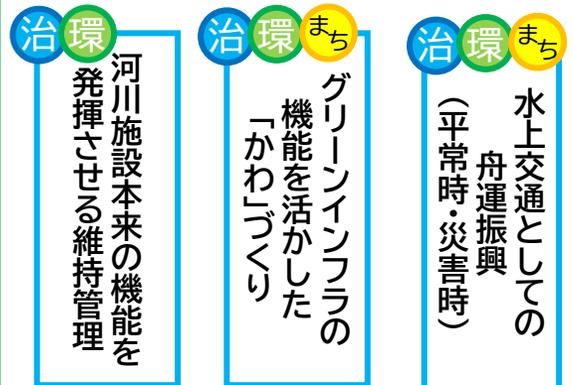
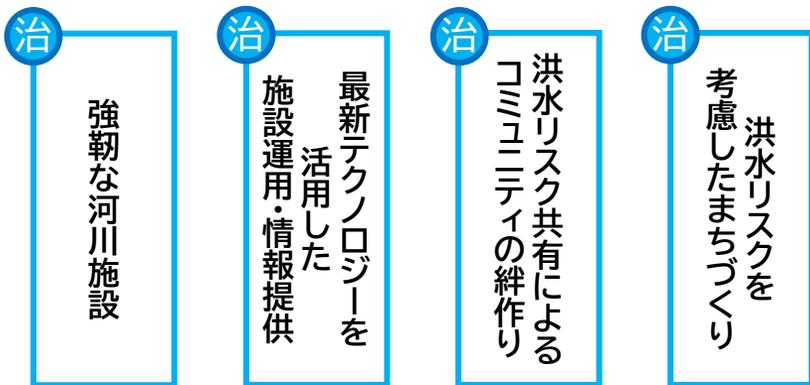
流域総合
水管理へ

「かわ」と治水

「かわ」と環境

「かわ」とまち

リスクに備える



日常の水辺空間

「かわ」と人

第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて



5.1 「かわ」と治水

① 河川区域・集水域・氾濫域の流域全てで取り組む治水対策

- 気候変動の影響により、大阪府域でも降雨が将来的にこれまでの1.15倍になるなど、これまで以上に大きな外力が河川に及ぶことが想定されています。
- これらの外力を受け止め、これまで進めている施設の整備に加え、更なる堤防や調整池、水門など治水施設の整備について検討を進めていきます。
- 施設整備だけではなく、限られた施設能力で最大限の治水効果が発揮出来るよう最新の気象予測や水位情報などのデータを積極的に活用し、状況に応じた最適な施設運用についても検討を進めていきます。
- 更に、すべての施設が本来の機能を十分に発揮できるよう、日常的な点検や計画的な維持管理を徹底します。
- また、気候変動進展のスピードに対応していくためには、流域全体での総合的な治水対策が重要です。
- そこで、流域治水の旗振り役として、河川管理者以外の方へも取り組むべき内容について具体的にお示しすることが出来るような取組を進めていきます。
- これらの取り組みを通じて、流域全体での多重的かつ柔軟な治水対策を推進し、府民の安全・安心を守るとともに、持続可能な「かわ」づくりを目指します。

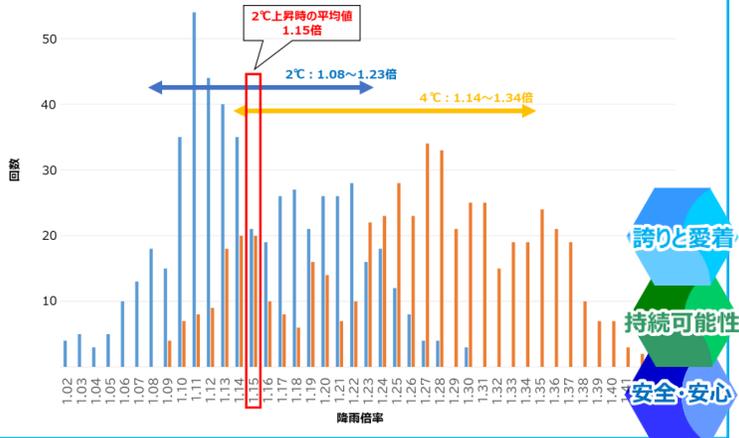
② 想定以上のどんな水害リスクに対しても「人」への被害0を目指して

- 計画上の取り組みを進めたとしても、想定を超える災害は発生し得ります。
- どのような状況でも「ひと」への被害をゼロにするためには「防ぐ」取り組み、いわゆるハード対策に加え、「逃げる」や「凌ぐ」といった取り組みを総合的に進めていくことが重要です。
- そのためにも、新技術を活用した災害・避難情報の提供を強化し、誰もが迅速かつ的確に情報を知り、行動できる環境を整えます。
- AIやIoTなどの先端技術を活用し、リアルタイムで分かりやすい情報発信を行うことで、避難の判断や行動を支援します。
- また、災害リスクを意識したまちづくりに向け、ハザードの情報提供やそれを活用した安全な避難経路の確保など、日常から災害に備えた地域づくりを支援します。
- さらに、「逃げ遅れゼロ」を実現するため、地域コミュニティの絆を深め、住民同士が助け合える体制づくりや、避難訓練・啓発活動の充実を図ります。
- これらの取り組みを通じて、想定を超える災害にも柔軟に対応し、すべての人の命と安全を守る社会の実現を目指します。

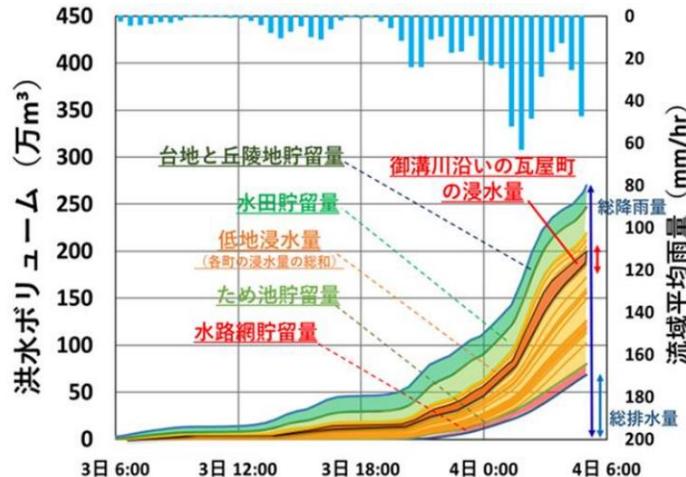
第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて

5.1 「かわ」と治水 取り組みのイメージと具体(例)

気候変動の影響を見据え、大阪府域における降雨量変化倍率(1.15倍)を見据えた取り組みを実施



流域治水の旗振り役として、気候変動の影響による外力の増大を意識した治水手法や数値の提案



洪水リスクを考慮したまちづくり
コミュニティづくり

左記の検討を反映させた流域治水PJの更新



コミュニティタイムライン作成を活かした訓練
(松原市)

新技術を活用した施設運用や維持管理、情報提供の検討

【事例】越流堤への転倒堰

将来の技術進展を見据え越流堤の可動堰化を検討した事例(国交省・牛津川)

遊水地の事例 (六角川支川・牛津川)

遊水地 牛津川 遊水地 牛津川 遊水地

図.8 改良のイメージ

遊水地の有効活用の例: 越流堤に転倒堰を設置し、洪水ピークをより効果的にカット(牛津川)

データの取得



データの蓄積・共有

流域データプラットフォーム

三次元河川管内図

データ更新
自動集計

共通データ基盤 全ての関連システムデータの一元化・最新化

流域に関する様々なデータを一元的に蓄積し、利用しやすい形で共有

データの分析・可視化

堤防変状状況の可視化 河川内ゴミの可視化・分析

重点対策箇所

複数の時点のデータを重ね合わせ

浸水想定1/100 区域内

異なるデータを重ね合わせて治水対策

避難に必要な防災情報の一元的な表示

マイデバイス向けモードイメージ

マイタイムラインモードイメージ

マイデバイス向けモードイメージ

アプリを利用して住民らが作成した避難行動計画を支援できる。災害の危険性が高まった際、避難ルートを案内する。

マイタイムラインは、住民一人ひとりが防災意識を高め、災害時の行動指針を明確にする。

持続可能性

安全・安心

新技術を活用した
維持管理、情報提供
(国交省)

(注釈)
本資料は意見交換のための資料であり検討中の内容となります。
そのため、内容については変更することがあります。

第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて



5.2 「かわ」と環境

① ネイチャーポジティブを意識した環境を改善させる「かわ」づくり

- これからは、ただ安全を確保するだけでなく、自然環境の再生と共生を図ることが出来る空間を目指すことが必要です。
- そのためには、「ネイチャーポジティブ」の視点を取り入れ、生き物が息づき、季節の移ろいが感じられるような川辺の風景を創出していくことが求められています。
- これらの「かわ」づくりを目指すにあたって、「か」:固めない、「ぶ」:分断しない、「き」:急変させない といったキーワードのもと、川の流れや生態系、流域との繋がりを守り、穏やかで持続可能な環境を作り、支えていくことを目指します。

② グリーンインフラを活用したWell-Beingな社会を実現する「かわ」

- また、これらの環境を改善させる「かわ」づくりは、地域を豊かにし、人々の心身の健康を支える場にもなります。
- 治水施設にも、グリーンインフラを積極的に取り入れ、自然と共生する「かわ」づくりを進めていきます。

環境を改善させるための「ネイチャーポジティブ」な河道の設計

- 「河道が動くこと」に留意した河道の初期形状、将来形状を予測し評価
- 河道や護岸を設計する上で、「か」:固めない 「ぶ」:分断しない 「き」:急変させない 連続性を保った設計

【2022年(COP15)で採択】
昆明・モントリオール生物多様性枠組
2050年ビジョン

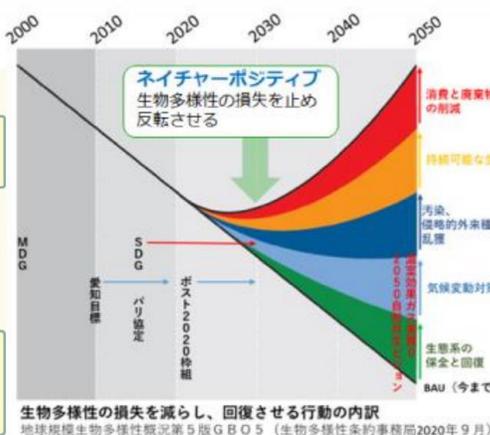
自然と共生する世界
(a world of living harmony with nature)

愛知目標から引き継いだ長期目標であり、我が国で培われた知恵と伝統に基づく考え方

↑
2030年ミッション

自然を回復軌道に乗せるために
生物多様性の損失を止め、
反転させるための緊急の行動をとる

ネイチャーポジティブ(自然再興)の考え方



生物多様性の損失を減らし、回復させる行動の内訳
地球規模生物多様性状況第5版GBO5 (生物多様性条約事務局2020年9月)

【出典】環境省ウェブサイト
(<https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/j-gbf/about/naturepositive/>)



「か」:水際を固めない(覆土、ぐり石を置く 等)
「ぶ」:護岸1枚で分断しない。落差も多段にする。
「き」:縦横断方向の粗度や環境を急変させない。

環境に配慮したグリーンインフラな治水施設的设计、施工

環境への影響を意識した
遊水地(円山川 中郷遊水地)



共生社会
生活の質
都市魅力
誇りと愛着
持続可能性

第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて



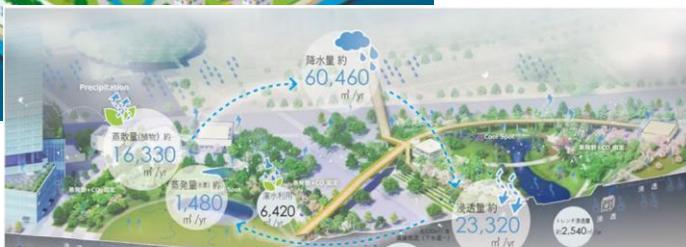
5.3 「かわ」とまち

写真を撮りたくなるような、絵葉書になるような、人や地域にとって気持ちの良い「かわ」づくり
～流出抑制だけでなく、気候変動の緩和や流域の水収支、利用を意識したまちとの関わりなど、水の恵みの最大化を意識した「かわ」づくり～

- 都市と自然が共存する持続可能な社会の実現に向けて、私たちは「かわ」とまちの関係性を再構築する必要があります。
- これまでは、雨水の速やかな排水や洪水対策が中心となっていますが、気候変動の進行による災害の激甚化・頻発化や水資源の枯渇が懸念される今、流域全体を視野に入れた新たなアプローチが求められています。雨水をすぐに排水するだけでなく、気候変動の緩和や流域の水収支を意識し、集水域とも連携した「かわ」づくりを目指します。
- また、「かわ」はまちと自然の「縁(ふち)」であると同時に、人と人、人と自然をつなぐ「縁(えん)」の場でもあります。その「縁」を意識して、地域や人、自然が混然一体となった関係性、場となるような場所の実現を目指していきます。
- 水の持つ恵みを最大限に活かし、未来に向けた持続可能なまちづくりを実現するために、今こそ流域全体での連携を進めていきます。

気候変動の緩和や流域の水収支を河川施設の設計、まち側との連携

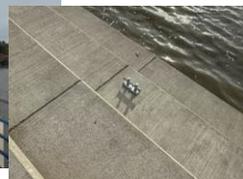
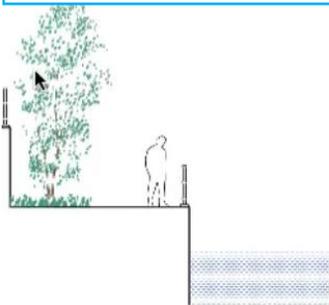
浸透・滞留・貯留・浄化・利用・排水
の視点によるスポンジシティ



流域の水収支を意識した施設設計イメージ (グラングリーン)

人の利用を意識した「かわ」づくり

地域のニーズに応じた護岸・河川空間整備による場の提供



地下鉄から舟運への乗り換えサイン (ロンドン)



東横堀川水門 旧管理棟のホテル利用



第5章 誰もが誇りたくなる「かわ」の実装化に向けて



5.4 「かわ」と人

「人」を中心とした活力ある「かわ」や都市の実現には、河川管理者だけではなく、ステークホルダー全員で取り組むことが重要となっています。そのためには、皆が少しずつ考え方や行動を変化させていく必要があります。河川管理者として「人」と「かわ」が交わるための場を提供していきます。

① 流域のあらゆる関係者が「かわ」と関わることの出来る場の提供

- 「かわ」は、単なる水の流れではなく、地域の自然環境や文化、暮らしに深く関わる存在です。
- だからこそ、流域に暮らすすべての人が川と関わる、川を知ることができる場をつくるのが大切だと考えています。
- 川を治水や防災のためだけの施設として捉えるのではなく、憩いやレクリエーション、地域交流の場としても活用できるような環境づくりを進めていきます。

② 大阪府の「かわ」や災害に対する知識・解像度を上げるための場や情報の提供

- かわの持つ役割やより良いものへとしていくためには、大阪府の川について知ってもらうことが重要です。
- 川の歴史や役割、そして災害時のリスクを学ぶことができるような場の提供。学校や地域団体と連携した学習プログラムや、防災訓練、展示イベントなどを通じて、川に対する「知識」と「解像度」を上げる取り組みが行っていきます。
- これらの活動を通じて、「かわ」と人との関係がより深く、豊かなものになることを目指しています。川は、私たちの暮らしの一部であり、未来へとつなぐ大切な資源。だからこそ、みんなで関わり、守り、楽しむことができるような環境づくりを進めていきます。

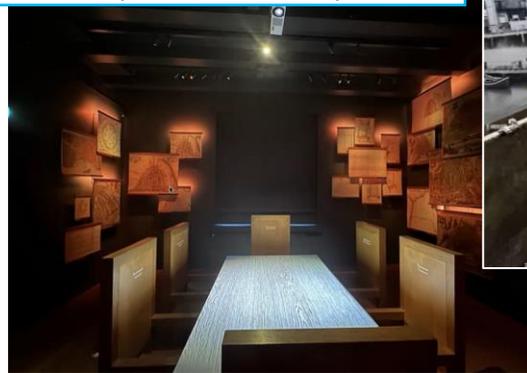
流域の関係者が様々な目的で関わることの出来るような場の提供

水都大阪フェス



大阪のなりたちや防災の教育を通じ、府民や来阪者の大阪の河川や洪水など災害に対する解像度を向上

まちやかわのなりたちについて教えてくれる博物館等の施設 (アムステルダム)



下水道の博物館 (ブリュッセル)



現場見学会や津波高潮STの活用した河川や災害を知るための場の提供